

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

昭和四十七年の三月二十一日、奈良県の明日香村で、日本最初の「壁画古墳」が発見され、色あざやかな万葉人の風俗が紹介されるに及び、戦後最大の発見として影響を与えた。

千二、三百年前はこのような人たちが逍遙していたのかと目の当たりに見る思いで、嘆声これを久しくするのみである。実物を實際見ると、それだけ昔にたいする自覚が深まる。歴史の認識とはそうした自覚の深まりのことだと思う。よく知らなかったものが、いっそうよく分かって、なるほどとすっかり肚に収めることができる。これが自覚の一つである。

日本では、古いものを頭から軽視してかかる傾向が強いのではなからうか。由緒あると思われるものでも、何でも片っぴからブチ壊してしまう。たとえば滋賀県野洲町の大岩山のように、二十四個もの多くの銅鐸を出土している点、日本では他に例のない古墳であるのに、新幹線の道床の盛土を採取する、という理由で打ち壊してしまっただけである。道床の盛土は他から持ってくる必要があったのである。

なにも古いものにこだわるのではない。新しいことで有益なことは、おおいにすべきである。しかし、目の前にあるものの価



伝統を見直そう

丸山竹秋

値を知らず、調べてみようともしないで簡単に打ち壊したり、撤去したりするのは、軽率のそしりをまぬがれまい。古いものの中には、役に立たないもの、不要なもの、害になるものなども確かにある。それらは撤廃したらよい。改めていけばよい。新しくためになるものを作りだしていけばよいのである。しかし、古い考えやものごとの中には、価値あるものが存在するのでもたまたまであるから、目先だけ見て軽率にふるまわないようにしたい。

知らないで自覚できない。自覚がない人は軽率になる。親祖先のことを知らないでそれだけ自覚できない。だから軽薄なふるまいをする。民族には伝統というものがある。それを知らないで自覚も生じないし、うすっぺらな行動をとる。

血の流れとか、遺伝とかいうことはもちろんある。しかしそれですべて片がつくのであれば、努力してもつまらないということになる。人間はそうではない。教育とか鍛錬とかいうものが、血の流れをよいほうに変えていく。そこに向上があり、進歩が生ずるのであるが、それらは自覚によってつくられる。その教育とか練磨とかいうのは、人間にその自覚をさせることにほかならない。

洋の東西を問わず、その自覚のある民族はしっかりしている。自覚のない民族は弱々しい。伝統を大切に民族は栄え、無視する民族は滅ぶのである。

（『あなたは生命の元を見つけたか』より）